

人生幸路

～今・昔・そして～

写真俳句・歌手活動

矢野 聖寿さん(65)＝松山市室町2丁目



「雪を被(き)て白川郷に灯が点(とも)る」。お気に入りの写真俳句作品を手にする矢野聖寿さん

個展を開催 CD制作も

加し腕を磨いた。

11年の退職時には「時間縛られず好きなことをしたい」と再就職の誘いを断り、夢を一つずつかなえた。まずは同年6月に写真俳句の個展を松山市で開催。その後も毎年開き、14年には写真俳句集を自費出版した。写真と俳句を合わせることで情景や作者の意図がよく分かる。芸術の一ジャンルとして見てほしい」と魅力を語る。

大のカラオケ好きで、「オリジナルの歌をCDで出したい」との願いも、13年に自主制作で実現した。自ら作詞作曲した松

妻ハルエさん(67)は「びっくりさせられる」と少々あきれながらも、「現役時代は仕事一直線で堅いイメージだったけれど、退職後、いろいろな人と付き合い合っていて柔軟になり、明るくなった」と温かく見守る。

高齢者施設で習字、絵手紙の指導や利用者と一緒にカラオケで歌うボランティアを一人としてきた矢野さん。今後はグループにも参加し、歌を楽しんでもらう活動に力を入れたら」と意欲は増すばかりだ。(花本和久)

小学校教諭を38年間務め、定年退職した矢野聖寿さん(65)。写真と俳句を組み合わせた写真俳句の個展開催や歌手活動など趣味に力を注ぎ、ボランティアにも励むなど、自由な時間を満喫している。

が浮かんだ。「朗らかで触れ合いを大切にしてくる先生だった。自分もあんな先生になりたい」と志し、愛媛大教育学部に進学。1973年、母校の今治市近見小で教員生活をスタートした。

小学校から大学までサッカーを続けた経験を生かし、若いころはサッカー指導に打ち込んだ。特に新玉小ではバスケットボール部顧問となり全園大会へ導いた。40代半ばで勤務時、全日本少年サッカー大会の決勝まで進み惜敗したこと。児童と一緒に涙を流した。「先生を胸上げたいと頑張ってくれたが、あと一歩届かなかった。子どもたちの気持ちがうれしかった」

その後、松山市へ赴任。写真俳句を始めたのは、再び今治市に赴任した2000年ごろ。身近な花や風景の写真を撮って自作の俳句を添え、郵便局や銀行でロビー展を開いた。先輩教員に誘われて写真グループにも参加した。角川博さん、伍代夏子さんからプロ歌手の前座で自由を歌う体験もした。



30代後半の矢野さん。若いころはサッカーがスポーツ指導に汗を流した